

およびモンバサ市、ナイロビ市における高齢者の生活状況の聞き取りなどを行った。ケニアの首都ナイロビなど都市の高齢者は「いつかは田舎に戻り、骨を埋める」という希望を持っており、一方農村部であるクワレの高齢者は、それを体現し、家族に囲まれて住み、敷地内の畑の端の見晴らしの良いところにある家族の墓地に埋葬される。高齢者の幸せを考えると、家族はもとより、土地や墓地を含めて考えねばならない。アフリカにおける保健システムは母子保健・感染症対策を基準として構築されており、中・高齢者に対する保健サービスが不足している状態である。例えば農村部では目を患っている高齢者も多く、むき出しの臓器である目は、何らかの事故にあい、それが適切に治療できなければ、長生きの人にとっては長らく障害を持ち続ける原因になっている。また、アフリカにおける高齢者の年齢は出生登録が不十分のため実際よりも多めに言われることも多いが、やはり本当に長生きと思われる高齢者も存在している。医療が不十分なアフリカ農村部であるからこそ、ヒトの寿命について研究できることもあると感じられた。（林 玲子 記）

2018年日本地理学会秋季学術大会

2018年日本地理学会秋季学術大会は、2018年9月22日～25日（24・25日は巡検のみ）、和歌山大学（和歌山県和歌山市）において開催された。一般研究発表84件、ポスター発表47件のほか、7つのシンポジウムで40件の発表があった。その他、3つの公開講座（高校新設科目「地理探究」と観光教育・地理総合講習会「次期高校学習指導要領の公表を承けて」・GIS講習会「地理教育に関するGIS講習」）や高校生ポスター発表（21件）があり、高校生の参加が多かった。以下、人口関連分野での主な発表を紹介する。

「出生力と死亡力の地域差が地域別将来推計人口に及ぼす影響」

小池司朗・菅桂太・鎌田健司（国立社会保障・人口問題研究所）・山内昌和（早稲田大学）

「中心なき合併市町村におけるスケール戦略を活用した地域づくり—山梨県北杜市の事例」

久井情在（国立社会保障・人口問題研究所）

「国勢調査における「不詳」の関連要因」 埴淵知哉（中京大学）・山内昌和（早稲田大学）

「人口移動の影響を考慮した親子同居の実質的地域差」 丸山洋平（札幌市立大学）

（鎌田健司 記）

世界社会科学フォーラム2018

「持続可能な未来のための生存・安全の確保と平等」

国際社会科学評議会（ISSC）が3年に一度招集する『世界社会科学フォーラム』が、日本学術会議、国際社会科学評議会及び国立大学法人九州大学主催の下、2018年9月25～28日、アジアで初めて福岡にて開催された。当フォーラムは、社会科学、行動科学の様々な学問分野が関連機関を横断し、学際的議論を深める機会を提供する社会科学系世界大会としては最大規模の国際学会である。初日には皇太子同妃両殿下ご臨席のもと開会式が行われ、世界80カ国から1000人以上の参加者を得て、非常に盛会であった。今次大会では「持続可能な未来のための生存・安全の確保と平等」をテーマとして、1. 持続可能性と生存・安全、2. サイバーセキュリティ、サイバー攻撃、ハイブリッド戦争、3. 人間の安心・安全、4. 生存基盤の確保と国連採択課題：持続可能な開発のための2030アジェンダ、

5. グローバリゼーション, 多様性と文化的帰属, 6. 都市と地方を包摂する開発, 7. 男女平等と人間の安全保障, 8. 健康, 安全とバイオセキュリティ, 9. 自由, 民主主義と安全確保の9つのサブテーマごとにセッションが組織され報告が行われた。本研究所より福田節也・企画部第2室長が出席し、「7. 男女平等と人間の安全保障」のセッションにて「Japan's Gender Revolution and Its Family Outcomes」と題した報告を行った。分野横断的な国際会議ということもあり、自分の専門とは異なる分野の研究に触れる良い機会であった。なかでも報告者は、Future design 研究のセッションに刺激を受けた。Future design 研究とは、仮想将来世代の利益をどのようにして「今」の政策決定に反映することができるか、を研究する学際的な試みであり、人口減少期を向かえた日本社会の持続可能性を考える上で大変示唆に富むセッションであった。(福田節也 記)

アジア太平洋地域高齢者会議2018 (イラン・テヘラン)

2018年10月23日(火)から25日(木)、イランのテヘラン市にて、アジア太平洋地域高齢者会議2018が開催された。この会議は、ヘルプエイジ、イラン国立福祉組織、イラン労働社会福祉省、国連人口基金(UNFPA)により主催・共催されたもので、「高齢化社会における家族、地域と国家」をテーマに、高齢者の社会包摂、所得保障、介護の3つの軸に関して、イランを含めた25ヵ国、6国際機関の参加者による報告・議論が行われた。筆者は「家族が変容する中で介護の在り方はどうなるか」という講演を行い、各セッションの議論に参加した。

イランでは、1980年代後半より日本の戦後同様の激しい出生率低下を経験し、そのため、人口高齢化のスピードは日本や韓国よりも速いことが見込まれており、また高齢者の独居割合は韓国よりは低いものの日本よりも高い状況となっている。家族介護も重要ではあるが、それを乗り越えて、現在急ピッチで高齢者医療・介護への取り組みが行われている。

会場には、東アジア・ASEAN 経済研究センター(ERIA)と日本国際交流センター(JCIE)による日本の「アジア健康構想(AHWIN)」のブースも設けられ、多くの来場者があったようである。会議の内容は、<https://www.ageingasiaconf2018.org/>より閲覧できる。(林 玲子 記)